

設計部会報告

健康維持増進住宅研究委員会
08.10.23
資料 7

部会長 小泉 雅生（首都大学東京 准教授）

1. 部会の目的

心身の健康の維持、増進のために、住まい及び住環境が果たす役割は大きい。住宅の設計にあたっては、その物理的な性能やそこで展開する生活像が個別に検証されることが多い。しかし、健康な暮らしにはそれらを横断的に捉えていく視点が不可欠である。

そこで本部会においては、単体の住宅から周辺環境まで、部材や設備機器から住まい方まで、様々なスケールとレベルで健康性の検証を行い、具体的な家づくり、街づくりのための指標を導きだし、健康維持増進住宅の有効な設計手法を開発することを目的としている。

2. 研究内容・活動方針

本部会における具体的な研究内容は以下の通りである。

(1)健康に関わる要素技術の把握

素材・ディテール・工法・設備機器など。

(2)健康に関わる空間・地域特性の把握

空間性・文化性、地域性・ユニバーサルデザイン・環境共生など

(3)要素技術と空間・地域特性の統合化

要素技術および空間・地域特性を、住宅設計という観点から検証し、統合化を図る。

(4)健康維持増進住宅設計手法の開発

要素技術と空間・地域特性をふまえた、横断的かつ総合的な健康維持増進住宅の設計手法の開発。

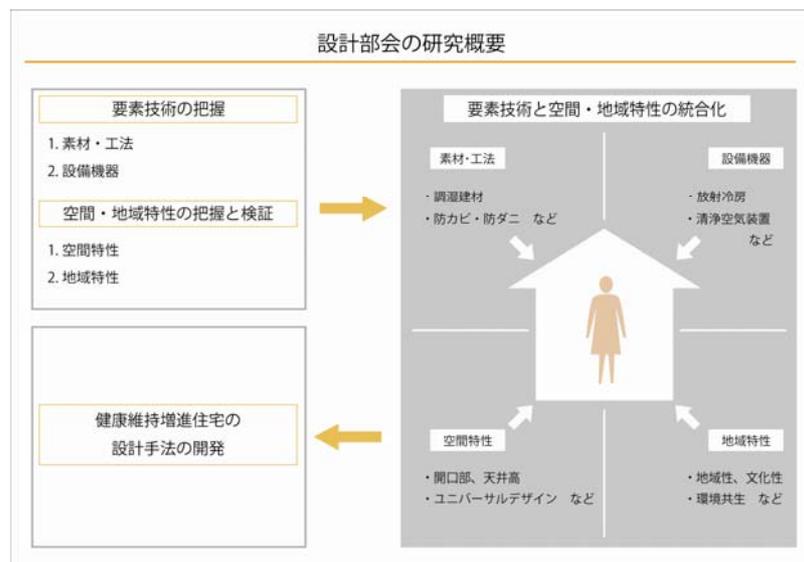


図 2.1 設計部会活動方針

3. これまでの活動報告

今年度においては、有識者へのヒアリングを中心として、健康維持増進住宅に関わる情報収集を行った。そのテーマと内容、得られた知見は以下の通りである。

(1)生活者が求める年代別ライフスタイル

ライフステージ・性別によって、住環境に求める性能が異なってくる。特に子育ての有無によって大きく異なる。ライフステージの変化に、住宅がどう対応できるのか考えていく必要がある。

(2)ユニバーサルデザインの街の設計

ユニバーサルデザインの街づくりにおいては、ベースとオプションという考え方があり、それぞれに法律とガイドラインが対応している。特に住環境においては、アプローチ部でのバリアフリー、玄関から道路までの段差に配慮が必要との指摘がされた。

(3)食と健康

栄養学においては、機能性を持った栄養素に注目するだけでなく、栄養素間のバランスの重要性を伝えることが課題となっている。その観点からわかりやすいバランスガイドが作られている。住においては、エンドユーザーに材料や性能について「気づかせる」ための仕組みと、バランスの重要性を伝えていく必要がある。

(4)健康と運動・環境

体を動かすことは、スポーツ(sport)、意図的な運動(Exercise)、日常的な身体活動(Physical Activity)と段階を分けてとらえられる。住宅内で体を動かしたいと思わせる環境が求められる。特に中高年には身体活動を促していく仕組みが、高齢者には交流を促し閉じこもりを防止する必要がある。

(5)介護予防・介護の観点からみた住宅の課題

住宅内事故をなくし、さらに「閉じこもり」を予防するための住まいの工夫が求められる。外出行動を維持するための歩行用補助具置き場の確保、自走用車椅子の利用を想定した出入り口、廊下幅員の見直し、介護ベッド周辺の電源・配線ルートの確保などが指摘された。

4. 設計手法の開発に向けて

本部会においては、上記の情報収集と並行して、目指すべき設計手法を探るべく、住宅における健康維持増進についてのディスカッションを広範な視点から行った。ディスカッションにおいては、健康への住まい手の能動的な意思をどのように取り扱うのか、など様々な課題が明らかになった。そこで、健康維持増進に関わる住宅関連の要因を、

- ・受け入れざるを得ないもの - パッシブなもの
- ・能動的に選択し、推し進めていくもの - アクティブなもの

とに整理し、住宅の設計においては

- ・ 不特定の住まい手に向けた住宅として備えるべき性能
- ・ 特定の個人に向けたオーダーメイドの住宅において可能性を持つ性能

とに分けてとらえるべきであるとの議論が部会内でなされた。

これらの議論を受けて健康維持増進に関する要素を以下の3つの視点から分類することが可能であると考えられる。

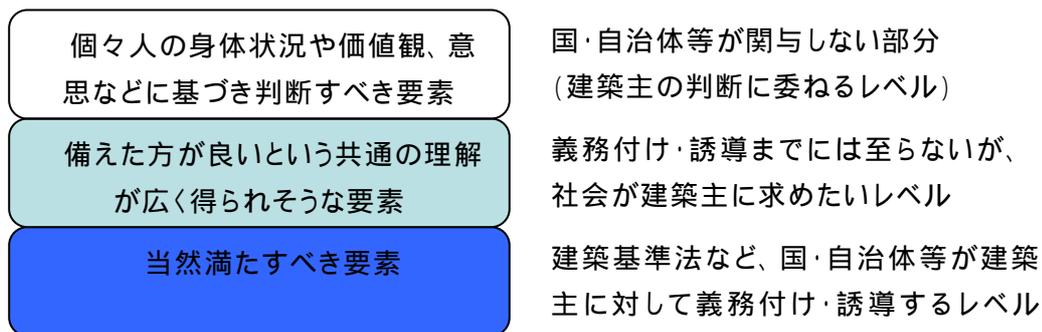


図 4.0

4 - 1 要素技術の分類

上記の概念図に基づき、住まい手のニーズや行為に関わる具体的な要素技術の整理を試行的に行ったものが表 4.2 及び表 4.3 である。

表4.1.1 住まい手ニーズに関わる要素技術の分類

レベル	食べ物(例)	バリアフリー		睡眠(光)	音・断熱・空気質... etc.
最低限	毒が入っていない	段差を無くせるようになって 廊下の幅員確保...etc. = 後から改修するのは難しい		寝室を真っ暗にできるよう になっている (シャッター開閉、雨戸開閉...etc.)	
誘導的	バランス良く30品目 ↕	あらかじめ下地を設けておく ↑	あえて段差を作り日常的に若干の負荷をかける ↑	寝室のカーテン交換可能	
個人の意見	肉が好き 肉を多く	身体状況に合わせる 個別に改修 ↑	積極的に体を鍛えたい トレーニングルームをつくりたい ↑	真っ暗にして寝る 遮光カーテン等 少し明るくして寝たい 常夜灯 朝は明るくしたい 薄いカーテン	
		↑ 日常的活動の維持 通常のバリアフリー		↑ 積極的な体力増進	

表4.1.2 レベルの考え方

最低限	誘導的	個人の意見
<ul style="list-style-type: none"> ・ 生きる上で必要なこと ・ 生活する上で必要なこと ・ 住宅として必要なこと ・ 住宅として、後から改修することが難しいこと ・ 予測される様々な状況に対応可能になっていること 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一般的に健康維持増進に良いとされていること ・ 将来発生するであろう「個人の意見」を実現するために準備しておくこと 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 健康のために住宅でし たいと思うこと (万人にとって健康 と思われるものでな くてもよい)

この表をもとに、住まい手のさまざまな健康に関わるニーズにあわせて具体的な要素技術や手法、考え方の整理・分類を行っていく。

4 - 2 健康に関わる住まい手ニーズの把握

日常生活の中での「健康ニーズ」に関する評価構造を探り、居住環境（特に住宅）との関係を把握する。個人差も含んだ評価項目を抽出し、構造的に表示する方法として評価グリッド法を応用する。具体的な手法について今年度WGにて検討を行い、家づくりを想定する層へのヒアリング調査を試行する。

5. 今年度の活動方針

今年度は、継続して

(1)有識者のレクチュア・見学会を通じて、健康と住まいに関わる情報収集を行う。

また、設計手法の開発へ向けて、以下の3つのWGを設置し、検討を行う。

(2)ライフスタイルWG

設計マニュアル/ガイドラインにおける、住まい手特性を設定するための検討を行う。ライフスタイル・ライフステージ・属性の把握、分析、類型化を行う。

(3)住まい手ニーズWG

個別の健康にかかわる要望を効果的に汲み上げていく枠組みのスタディを行う。今年度内にニーズ把握のための試行を検討する。

(4)ガイドラインWG

これらの活動を通じて、設計マニュアル/ガイドライン案の検討を行う。

(5)その他

学生対象のアイデアコンペを実施する。健康維持増進住宅に関わる優れたアイデアを公募し、評価・授賞を行うことで、広く健康維持増進住宅の普及・促進を図る。